

趣味

He i.

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

趣味であり、P限定への中継地点

趣味

目

次

1

趣味

さつき出したばかりのグラスが空になる。中身の水は食道ではなく、武治の長髪を伝つて床に落ちていた。

またか、と武治は思う。

酒に入るといつもこうだ。先程から怒鳴り散らしている台詞には全くもつて文脈というものが感じられず、とにかく家財を散らかして暴れ回り、まさに癪癩と呼ぶに差し支えない様相だった。

はじめのうちは、お前は間抜けだ無能だとこちらへの人格否定を繰り返すが、ある程度酔いが回ると泣きが入る。そうすればあとは放置して寝るまで待てば良い。それまでは何を言われても黙つて話を聞き流し、頷き、謝罪し、ご機嫌をとつてやる。罵倒されるのは素面のときも同じことだ。

散々無能だなどと怒鳴られても、武治はそこまで気にしていなかつた。少なくとも本人は気にしていないつもりだ。

武治には、一対一で父に勝てる自負があつた。自分より下の相手に何を言われたところで、気に留めることはない。：と、考えている時点で、父の言葉が武治の思考に十分

影響を及ぼしていることは明白だが、武治はそれを認めない。

父に「無能だ」と言われたことを間に受けているわけではない。勝てる自負があるのは本当だ。

ではなぜそうしないのか。

一度完膚なきまでに叩きのめしてしまえば、父も萎縮して自分に危害を加えてこなくなるかもしれない。

しかし武治はそうしない。自分より格段に弱い相手なのに、罵倒されても水をかけられても殴られても反抗しない。ただ体に痣を増やしている。父が酔つて眠つたあとに、壊された家財の破片を集めて捨てて、自分の指が切れていることにも気付かぬふりで、父に都合の良いように過ごしている。

武治は父に怯えていた。

できないことがあるとすぐに殴られた。小さいうちはよく泣いたが、母が首を括つて死んだときから、泣き方さえ忘れたようだつた。

「こんな」ともできなくてどうする」「俺の息子だろう」「お前が無能だと俺が恥をかく」「こんな調子では人前に出せん」「腕が折れても止めるな」「口答えするなら舌を落としてやる」

過激なこともよく言った。そして実際にやる男だった。

武治の右腕には、前腕から指先にかけて大きなケロイドがある。父につけられたものだ。

あの日は特に機嫌が悪かつた。上手くやらねばと思うほど心は乱れ、指先が震え、失敗するたびに父の平手が飛んできた。

業を煮やした父が持ち出したのは湯を沸かしたばかりの薬缶だつた。これから何が起くるかを察した幼い武治の顔が真っ青に染まる。泣き叫んで謝罪したが無駄だつた。腕に当たつて落ちた湯がばたばたと音を立ててカーペットに落ちた。一瞬の痛みはあつたが、その後は痛覚が馬鹿になつたようで何も感じなかつた。ただ生理的な涙が溢れ、肺に残つた空気を全て喉から押し出して悲鳴をあげていた。

背が伸びるたび、雨が降るたび、指で触れるたび引きつれて痛みを生じるその傷跡が、未だに武治をあの頃に縛り付けていた。

ようやく酔い潰れた父をベッドに押し込んだ武治は、水をかけられて冷えた体を温めるためにシャワールームに向かつた。

また別の日。

酔つた父が突つ伏して泣き出したタイミングで部屋を出る。父が寝たらあとは花瓶を片付けて、本もしまつておかなくては。それから濡れたカーペットを干して、机を置き直して、ダメになつた書類を確認して、空いた酒瓶を捨てて、それから、それから、そ

れから。

「真知子」

またその名前か。

泣き出すといつもその名前を呼んでいる。お前が死なせたくせに。仏壇の手入れもしたことはない。昔から全部全部母さんに俺に押し付けて、甘い蜜だけ啜つて、幸せな記憶に繋り付いてそうして生きている。お前が愛したのは母さんじやない、ただ自分に都合のいい存在だろう。誰だつてよかつたくせに、唯一の人みたに母さんの名前を呼ぶな。お前が殺したんだ。

ガラスの割れる音が、武治の思考を中断させる。

泣き出してからの父はものを壊すことも少ない。何かあつただろうかと中を覗くと、割れた酒瓶が目に入る。どうやら叩き割つたのではなく、机から落ちて割れたようだ。それから、ツンとくるような異臭が鼻をさす。

父が吐いたようだつた。父は倒れこみ、喉からごぼごぼと音を立てている。この状態で放置すれば、吐瀉物が喉に詰まつて窒息死してしまう。

早く助け起こすべきだな。

部屋に入り、父に近づきながらどこか他人事のように武治は思う。ようく、ではなく、本当に他人事だったかもしれない。

武治は笑っていた。

酸素不足で痙攣する肢体を見て、声も出せず必死に手を伸ばして助けを求める父と目を合わせて、武治はうつそりと笑っていた。

ふ、と声が漏れる。

一度漏れてしまうともう堪え切れない。堰を切ったようにげらげらと笑い出す。部屋に充満した異臭も高揚感を引き立たせるスパイスにしかならなかつた。